

覚深法親王像

この像は覚深入道親王（または覚深、1588～1648年）の像である。覚深は皇族を先祖に持つ僧侶であり、13歳のときに出家して仁和寺の僧となった。当時、仁和寺はまだ応仁の乱（1467～1477年）による火災によって荒廃したままの状態であった。長年にわたって荒れ果てた状態が続いていたのである。覚深は仁和寺にかつての栄華を取り戻す決意をし、当時の将軍であった徳川家光が1634年に京都を訪れた際に面会を願い出て、資金援助と再建の許可を嘆願した。覚深の願いは聞き入れられた。家光の父である徳川秀忠が、この17年前に仁和寺に対して後援の印を授けていたのだが、家光は仁和寺の再建を支援することを約束したのである。再建のプロセスには数年の遅れが生じ、本格的に再建が始まったのは1640年になってからであった。しかし、その6年後には仁和寺は再び完全な姿に戻ることができた。それ以後、さらに複数の火災に見舞われたが、17世紀半ばのこの再建時につくられた基本的な伽藍配置は、今日まで変わっていない。